

博多 114

— 博多遺跡群第155次調査報告 —



2007

福岡市教育委員会

博多 114

— 博多遺跡群第155次調査報告 —



遺跡略号 HKT-155
遺跡調査番号 0544

2007

福岡市教育委員会



博多遺跡群第 155 次調査北西半 全景 (南西から)



トレンチ III 南東側 (北東から)



鉄絵草花文盤 (31)



線彫草花文三彩盤 (36)

序

福岡市には多くの文化財が分布しており、本市では文化財の保護、活用に努めています。しかし本市では各種の開発事業も多く、やむを得ず失われる文化財については記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は共同住宅建設に先立って調査された博多遺跡群第155次調査の報告であります。発掘調査の結果、中世を中心とした遺構・遺物が見つかりました。博多遺跡群は古代から中世に栄えた都市遺跡として著名ですが、まだまだ性格不明の部分が多くあります。本調査は博多遺跡群の縁辺部にあたる地点で、その成果は博多遺跡群を総合的に研究する際に重要な意義をもっております。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野での一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた、株式会社コンダクトをはじめとする関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 植木とみ子

例　　言

1. 本書は共同住宅建設に先立って、福岡市教育委員会が、2005年10月3日～10月26日にかけて行った博多遺跡群第155次調査の発掘調査報告書である。
2. 検出した遺構については、調査時に遺構を示す記号Sを付して検出順にS-1,S-2,のように通し番号をつけた。本文ではこの番号に遺構の性格を示すアルファベットをSのあとに付しSK-1のように記述する。
3. 本書で使用する方位は真北である。
4. 本書で使用した遺構・遺物実測図は福岡市教育委員会埋蔵文化財第一課 赤坂亨が作成し、製図は赤坂・石水久美子が行った。
5. 本書で使用した写真は、赤坂・上方高弘が撮影した。
6. 陶磁器の分類およびの時期比定には以下の文献を参照した。
山本信夫 2000『太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』(太宰府市教育委員会)
7. 報告書抄録は裏表紙に記載した。
8. 本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので活用されたい。
9. 出土銭および鉄・銅製品の保存処理、X線による銭貨名解読は福岡市埋蔵文化財センターに依頼した。

遺跡調査番号	0544		遺跡略号	HKT-155	
地番	福岡市博多区須崎町53番		分布地図番号		
開発面積	239.18 m ²	調査対象面積	123.67 m ²	調査面積	58.9 m ²

本文目次

I.はじめに	
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査体制	1
II.遺跡の立地と環境	4
III.調査の記録	
1. 概要	4
2. 層序	6
3. 遺構・遺物	9
IV.小結	14

挿図目次

第1図 博多遺跡群における第155次調査の位置(1/8,000)	2
第2図 博多遺跡群第155次調査区位置図(1/1,000)	3
第3図 博多155次調査区概念図	4
第4図 調査区遺構配置図(1/80)	5
第5図 トレンチI・III土層図(1/40)	8
第6図 SK-1・7実測図(1/40)およびSK-1出土遺物実測図(1/3)	10
第7図 SK-2実測図・トレンチII土層図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)	11
第8図 トレンチII北西壁出土土器R-01実測図(1/4)	12
第9図 ピット・遺構外出土遺物(1/3)および博多遺跡群第155次調査出土銭(2/3)	13

表目次

第1表 トレンチI・II・III土層注記	7
第2表 博多遺跡群第107次調査出土遺物観察表	15
第3表 博多遺跡群第155次調査出土銭一覧	15
第4表 博多遺跡群第155次調査出土銭貨名一覧	15

巻頭図版目次

- 卷頭図版1 1. 博多遺跡群第155次調査北西半全景 2. トレンチIII南東側
卷頭図版2 1. 鉄絵草花文盤 2. 線彫草花文三彩盤

図版目次

PL1	1. 博多遺跡群第155次調査区南東半全景	2. 盤出土状況
PL2	1. トレンチI南東壁土層 北東側	2. トレンチII北西壁土層
PL3	1. SK-1 碓・遺物出土状況	2. SK-1・SK-7 完掘状況
PL4	1. SK-2 碓・遺物出土状況	2. SK-2 完掘状況
PL5	1. 博多遺跡群第155次調査出土遺物	

I. はじめに

1. 調査にいたる経過

平成 17 年 4 月 12 日付けで株式会社コンダクトより福岡市教育委員会埋蔵文化財課（現 埋蔵文化財第一課）宛に福岡市博多区須崎町 53 番の物件に関して、共同住宅建設に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号 17-2-32）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群（分布地図番号 49- 天神 0121・遺跡略号 HKT）に含まれている地点であり、この申請を受けて埋蔵文化財課では申請者と協議の上、平成 17 年 5 月 11 日に申請地内の試掘調査を行い、現地表面から 220 cm 下のにごった灰黄色砂層で中世の井戸・土坑と思われる遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、平成 17 年度に発掘調査、平成 18 年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。なお調査対象としたのは開発面積 239.18 m² のうち、共同建築建物部分の 123.67 m² である。

調査期間は平成 17 年 10 月 3 日から 10 月 26 日までである（調査番号 0544）。調査面積は 58.9 m²、遺物はコンテナ 20 箱分出土している。また、整理作業と報告書の刊行は 2006 年度に行つた。

現地での発掘調査にあたっては株式会社コンダクトをはじめとする関係の皆様から発掘調査について御理解いただきと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して深い感謝の意を表します。

2. 調査体制

事業主体 株式会社コンダクト

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課（現 埋蔵文化財第一課）

調査総括 山口謙治（埋蔵文化財課長 現 埋蔵文化財第一課長）

池崎謙二（前任 埋蔵文化財課調査第 2 係長）

山崎龍雄（現任 埋蔵文化財第一課調査係長）

調査庶務 鈴木由喜

調査担当 調査第 2 係 赤坂亨

調査作業 水田ミヨ子 杉村百合子 酒井康恵 米倉國弘 草場恵子 辻美佐江 村井藤枝

大崎宏之 村山巳代子 西村 登 西村寿美枝



第1図 博多遺跡群における第155次調査の位置 (1/8,000)



第2図 博多遺跡群第155次調査区位置図 (1/1,000)

II. 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は現在の博多川と石堂川の間の河口部に位置する、弥生時代から現代まで継続する都市遺跡である。博多遺跡群は三列の砂丘によって形成され、博多遺跡群第155次調査地点はその最も海寄りの「息浜」と呼ばれる砂丘の西南端に位置する。現在の博多川の川岸までは70mの距離がある（第1図）。博多遺跡群の中でも須崎町は発掘調査の例が調査時点において3件と少なく、須崎町で最も近い地点の調査としては博多遺跡群第123次調査がある。本調査地の東方約100mの位置にあり、平安時代末～13世紀前半の遺構が確認されている¹⁾。須崎町東側の古門戸町では調査地の東方約100mで第78次が、北方約120mで第122次調査が行われている。第78・122次とともに平安時代末～16世紀の遺構が確認されている²⁾。また2006年度には古門戸町で第165次調査が行われ、現在整理中であるが第155次調査と類似した焼土ブロック整地層が確認されており、本調査地点との関連が伺える内容となっている（第2図）。

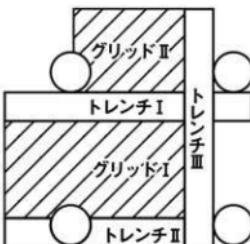
III. 調査の記録

1. 概要

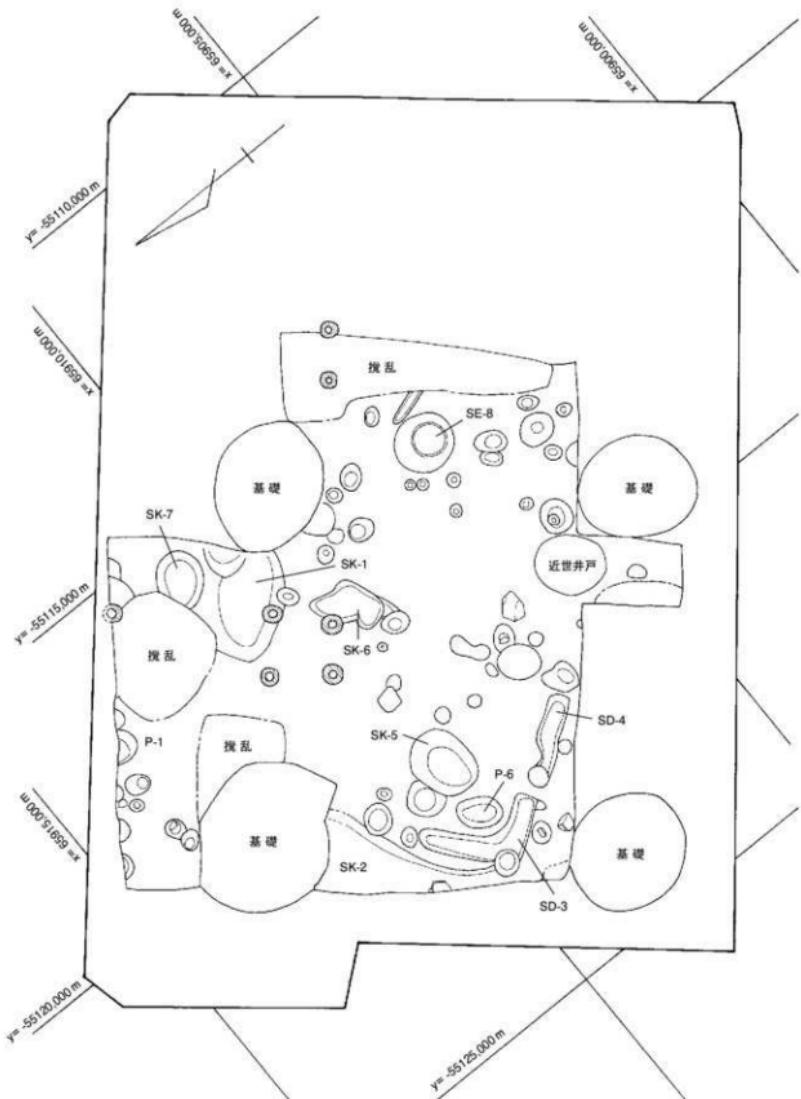
中世の溝1・土坑1、近世以降の柱穴20数基を検出した。遺物は中世の陶磁器・土師器・須恵器が出土した。遺物の量は合計でコンテナ20箱分である。

調査開始に先立ち2005年9月27・28日、矢板内を地表面下200cmまで重機によるすき取りを行った。道路に面した調査区南東部分を廃土置き場とし、遺構の残存状態の良い、既存建築物の鉄筋コンクリート柱の間を調査対象とした。調査はまず調査区の中央（トレンチI、10m×幅1m）と北西（トレンチII、7.5m×幅1m）に北東～南西方向のトレンチを2本掘削し、調査地点の層序を確認した後、トレンチIとIIとの間をつなぐ形で調査区北西半（グリッドI、4.5×7.5m）の調査を行った。グリッドIの調査終了後、調査区南東半（グリッドII、3.5×5m）の調査を行った。グリッドII調査終了後、トレンチIに直交する形でトレンチIIIを掘削し、北西～南東方向の層序を確認して調査を終えた。調査区全体の形状はトレンチIの左右にグリッドIとIIが取り付いた不定多角形を呈する（第3図）。

10月3日に機材搬入、作業員を投入し調査を開始した。同日、調査区中央の南北方向にトレンチIを設定し掘削、堆積状況を確認。その結果3面の焼土を含む整地層と標高1.7mで砂丘と思われる砂層の広がりとを確認した。10月4日よりグリッドIの調査開始。10月17日にグリッドIの調査終了。同日よりグリッドIIの調査開始。10月21日グリッドIIの調査終了。10月26日現場より機材を撤収し、調査の全行程を終えた。座標は、光波測定器を用い、国土座標を基準点節5・T26を結ぶ二点結合トラバースにより調査区内へ座標移動を行った。なお基準点節5・T26の国土座標は平成4年3月に西技測量設計株式会社の行った博多地区遺跡基準点測量委託の測量成果に基づいている。座標値はGioplan ver2.99にて計算。閉合差 = 0.056m、閉合比 = 0.056/441.404 = 1/7882であった。



第3図 博多155次調査区概念図



第4図 調査区造構配置図 (1/80)

2. 層序

層序はトレント I 南東壁、トレント II 北西壁、トレント III 南西壁で確認した。重機による表土すき取りは地表下 200 cm (標高 2.300m) まで行い、それ以下は人力によって掘削を行った。本調査区の層序は①基盤砂丘層②河川～浅海堆積砂層③整地層④表土を含む搅乱層の 4 つに大きく分層できる。堆積の順は①→②→③→④である。

トレント I

基盤の砂丘層はトレント I の北西端では標高 1.700m で確認された。南東方向に行くに従い砂丘は下がり、トレント III との交差部分では標高 0.900m になっている。このような傾斜は、本調査地点が博多遺跡群の博多派と呼ばれる砂丘列の南西部の縁辺にあたり博多川に向かって砂丘が緩やかに傾斜している場所のためである。②は河川堆積である 11・11'・14・15・16 層と風性砂である 5・10 層に分けられる。河川～浅海由来の粘質土が交互に堆積している層である。河川堆積層の上に風性砂の層が堆積し、2 が水平に堆積した状態でここに生活面が形成された。この面から掘り込まれている遺構が SK-1 である。SK-1 の年代から②は中世前期には堆積していたようである。この上に黒褐色砂質土を中心とした③が堆積している。②③境界面の標高は 1.500～1.700m である。標高 1.700m ではほぼ水平であるが南西側で低くなっている。③は大きく 1 層、2・17 層、3・4・4' 層の 3 つに分層できる。それぞれの層で柱穴と建物礎石が確認できている。1 层と 2 層の境界面は一部非常に硬化した焼土層を含み、道路遺構の痕跡かと思われた。しかしこの焼土はトレント発掘からグリッド I の平面発掘に移行した際に面的に確認できず、道路遺構かどうかは確認できなかった。③の時期は出土遺物から中世後期～近世と思われる。

トレント II

トレント II は調査区北西に、トレント I と平行する方向に設定した。土層は②③を確認した。地下水の湧水する標高 0.500m まで深掘りしたが①に到達しなかった。②③境界面の標高は 1.400m である。SK-2 の埋土である 4'・27 層からは多数の礎が含まれている。また②の中にもいくつか礎が含まれている。③は大きく 1 層、2・21・25・26・29・30 層、22 層、4'・18'・23・27・31・32・33・34 層の 4 つに分層できる。トレント I と異なり各層からの遺構の掘り込みはみられず、1 层と 2' 層の境界面で焼土層は確認されなかった。また層の堆積状況もトレント I のように水平ではなくややゆるやかに波を打っている。

トレント III

トレント I と直行方向に調査区南西に設定した。土層は②③④を確認した。地下水の湧水する標高 0.500m まで深掘りしたが基盤砂丘層に到達しなかった。②③境界面の標高は 1.500～1.600m であり、北東側がやや高い。②はグリッド I 側がほぼ水平堆積であるのに対し、グリッド II 側は堆積に乱れがあり 20 cm 大の礎が含まれていた。②と③の境界面からの遺構の掘り込みは確認できなかった。③は大きく 1 層、2・2'・18・37～39 層、3・4・4'・23 層の 3 層に分層できる。特に 1 層と 2 層との境界面からの柱穴の掘り込みを多く確認した。

トレント I 掘削の結果、整地層の中に少なくとも 3 面は遺構面があることが確認された。特に 1 層と 2・2' 層の境界は土層では明瞭であったため、トレント掘削が終了した時点では、この面と②③境界面の 2 層を遺構面として設定し、発掘する予定であった。しかしグリッド I の平面発掘に移行した段階では、トレントでは捉えられた焼土が搅乱などの影響で面的に広がっていないこと、遺構

の堀方を確認できなかった。そのため1層と2・2'層の境界面を遺構面として調査することを断念し、②③層界面まで掘り下げる。③の出土遺物はグリッド毎に一括して取り上げた。

トレンチ調査の結果から遺構面は東側が高く南・西側に向かって傾斜している事が確認された。これは現状の地形とはほぼ同様の傾向である。トレンチⅠ北西端で砂丘上面の標高が1.700mであったことを考えると、基盤砂丘層は本調査地点中央付近から急激に落ち込むようである。

第1表 トレンチⅠ・Ⅱ・Ⅲ土層注記

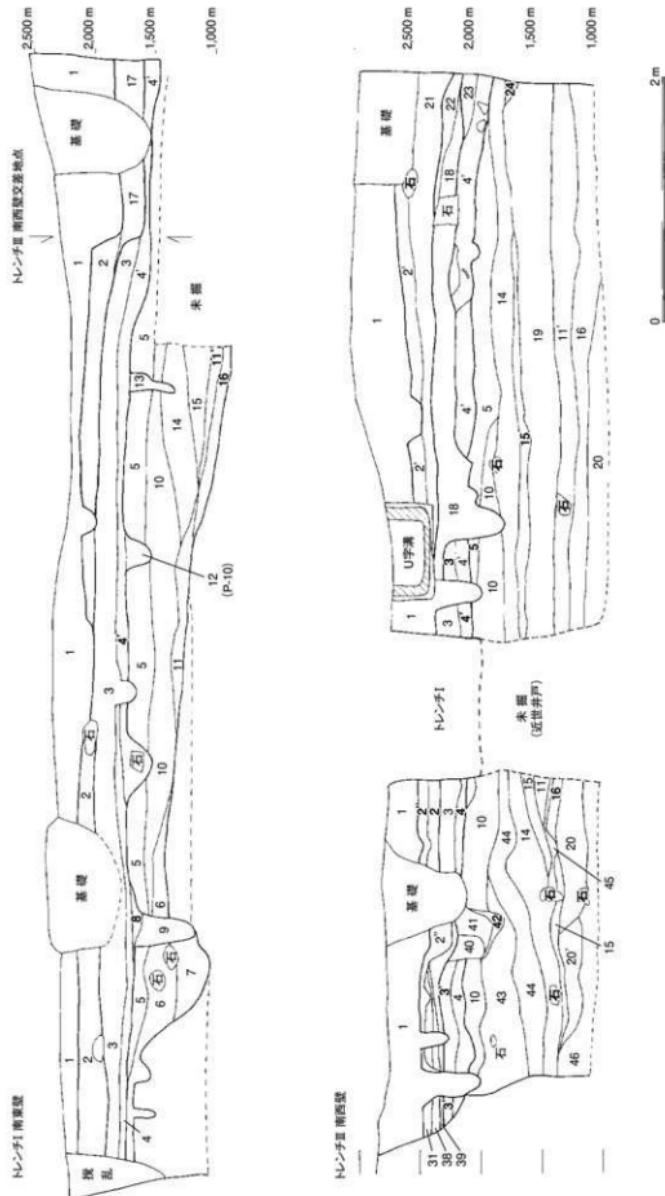
層	色調	土質	しまり	大別	トレンチ	備考
1	黒褐色	粘質土	あり	(3)	I・II・III	
2	灰褐色	粘質土	あり	(3)	I・III	灰褐色。2層最下に砂土と混
2'	灰褐色	粘質土	あり	(3)	II・III	2層に対応するが、色調がやや異なる
2''	灰褐色			(3)	III	2層の上層
3	黒褐色と灰褐色の互層	粘質土	あり	(3)	I・III	上層が黒褐色
3'	暗褐色	粘質土		(3)	III	白褐色鉛との互層。3層より色調がやや暗い
4	黒色	灰と砂土	ややあり	(3)	I・III	
4'	黒色	灰と砂土	ややあり	(3)	I・II・III	ほぼ4層と同じだが、鉛との互層になっている
5	白褐色	砂	なし	(2)	I・III	10層より砂が細い。黒褐色の鉛が少し入る
6	黒褐色～暗褐色	粘質土と砂土	ややあり	(2)	I	
7	灰褐色	砂	なし	(2)	I	6層のしみの可塑性有利
8	暗褐色	灰と砂土	あり	(2)	I	
9	暗褐色	砂質土～砂	ややあり	(2)	I	
10	白褐色	砂	なし	(2)	I・III	5層より砂粒が細かく均一。風成鉛
11	黒褐色	粘質土	ややあり	(2)	I・III	
11'	黒褐色	砂質土～砂	なし	(2)	II・III	11層に比べて砂が多い
12	白褐色と黒褐色の混合	砂質土～砂	なし	(2)	I	4層と5層の混合
13	暗褐色	砂質土～砂	なし	(2)	I	14層より色調が暗い
14	暗褐色	砂	なし	(2)	I・II・III	泥と含む
15	褐色	砂	なし	(2)	I・III	泥と薄らぎがあるで不均質
16	暗灰～灰褐色	砂	なし	(2)	I・III	
16'	暗灰～灰褐色	砂	なし	(2)	II	16層と比較して酸化鉄混じり。河川性堆積
17	暗褐色	粘質土	ややあり	(2)	I	
18	暗灰色	粘質土	あり	(3)	I	2層より一律で均質
18'	暗黃灰色	粘質土	あり	(3)	II	陶器瓦の出土層。18層より均一
19	暗褐色	砂	なし	(2)	I・II・III	
20	暗灰～暗褐色	砂	なし	(2)	I・III	赤褐色鉛を含む
21	白褐色	砂	なし	(3)	II・III	
22	暗系褐色	砂質土	あり	(2)	II・III	壁出土層
23	暗茶系～黒褐色	砂質土	あり	(3)	II・III	
24	暗褐色	砂	なし	(2)	II・III	
25	灰色	灰と砂	あり	(3)	III	
26	灰灰褐色	粘土と粗砂		(3)	III	
27	暗褐色	砂	なし	(3)	III	
28	暗灰褐色	砂	なし	(2)	III	
29	暗系褐色	粘質土	あり	(3)	III	地上に含む
30	黒褐色	粘質土	あり	(3)	III	地を含む
31	黒褐色	粘質土	あり	(3)	III	地上少量含む。30層より均質
32	暗灰褐色	粘土	あり	(3)	III	
33	黒褐色	粘質土	あり	(3)	III	27層より均質で砂・石が少ない
34	褐～暗褐色	砂質土	ややあり	(3)	III	風化のあるやや汚れた層
35	暗白褐色	砂	なし	(2)	III	風化のあるやや汚れた層
36	白褐色	砂	なし	(2)	III	泥と多く混ざる
37	暗褐色～褐褐色	粘質土		(3)	III	灰・灰が多く混ざる
38	黑色	灰		(3)	III	焼けた炭の層
39	暗褐色	粘質土		(3)	III	37層に岩似するが、より均一
40	褐～暗褐色	粘質土		(3)	III	
41	黒褐色と褐色の互層	灰と砂土		(3)	III	4層に類似。図示した方向に互層が堆積
42	黒褐色	灰と粘質土		(3)	III	灰を多く含む
43	褐色	砂		(2)	III	14層より色調が暗く、白褐色鉛が風化する
44	白褐色	砂		(2)	III	枝子粗くやや汚った色
45	褐色	砂		(2)	III	20層より濃い色調
46	暗褐色	砂		(2)	III	安定した河川性堆積の層

色調：土層全体の中での相対評価。調査者の判断に基づく。

しまり：土層全体の中での相対評価。土層の固さによって「ややあり」・「なし」の3段階に評価。

大別：本調査地点の大別できる4つの層序。①基盤砂丘層②河川～浅海堆積砂層③整地層④表土を含む擾乱層
トレンチ：この層がどのトレンチの土層で確認できたかを示す。複数のトレンチで確認できた層もある。

第5図 レンチ I・III 土層図 (1/40)



3. 遺構・遺物

遺構は土坑5基(SK-1・2・5・6・7)、溝2条(SD-3・4)、井戸1基(SE-8)を確認した。このうち明確に遺構であると認定できるのはSK-1・2・7である。井戸SE-8は煉瓦を井戸枠に用いたもので、時期は近世～近代であるため除外した。

土坑

SK-1 (第6図)

トレントI掘削中に検出した。一部コンクリート柱に切られている。長楕円形の土坑で長径200cm短径180cm深さ40cmを測る。中層から多数の礫群と陶磁器片が出土した。礫群に規則的な配置は見られない(PL3-1)。陶磁器と共に一度に埋没したものであろう。SK-7に切られている。

SK-1の遺物は上層(礫群より上)、礫群中、下層(礫群より下)の3つに分けて取り上げを行った。土師器・龍泉窯系青磁・白磁・陶器甕が出土している。土師器は主に下層から出土しており、土師器小皿の口径平均値8.1cm器高平均値1.03cm、土師器杯の口径平均値13.0cm器高平均値2.43cmである。土師器は上層・礫群中からも出土しているが時期差が捉えられるほどの大きさの違いは見られない。龍泉窯系青磁31類も3層いずれからも出土しており、この点からも時期差は認められない。礫群を含め遺構の埋没は短時間のうちに起こったものと思われる。SK-1の時期は13世紀中頃～14世紀初頭である。

SK-2 (第7図)

トレントII掘削中に検出した。覆土中から多数の礫が出土した。礫群は壁際に列をなして出土したが規則的な配置ではない(PL4-1)。SK-1同様一度に埋没したものと思われる。遺構の半分以上が調査範囲外のため全体の規模・形状は不明。深さ30cmを測る。溝の可能性もあるが、幅が広いこととコンクリート柱の反対側まで延びていないことから土坑と判断した。トレントIIの土層では4'・27'・32'・33'・34'層がSK-2の遺構覆土である(第7図)。

SK-2の遺物は上層と下層(礫群以下)の2つに分けて取り上げを行った。下層の方が図化可能な遺物の出土が多かった。土師器・龍泉窯系青磁・白磁・陶器甕・滑石製石製品が出土している。また図示できなかつたが口禿げ口縁の白磁片(白磁IX類)も出土している。SK-2の時期は13世紀中頃～14世紀初頭である。

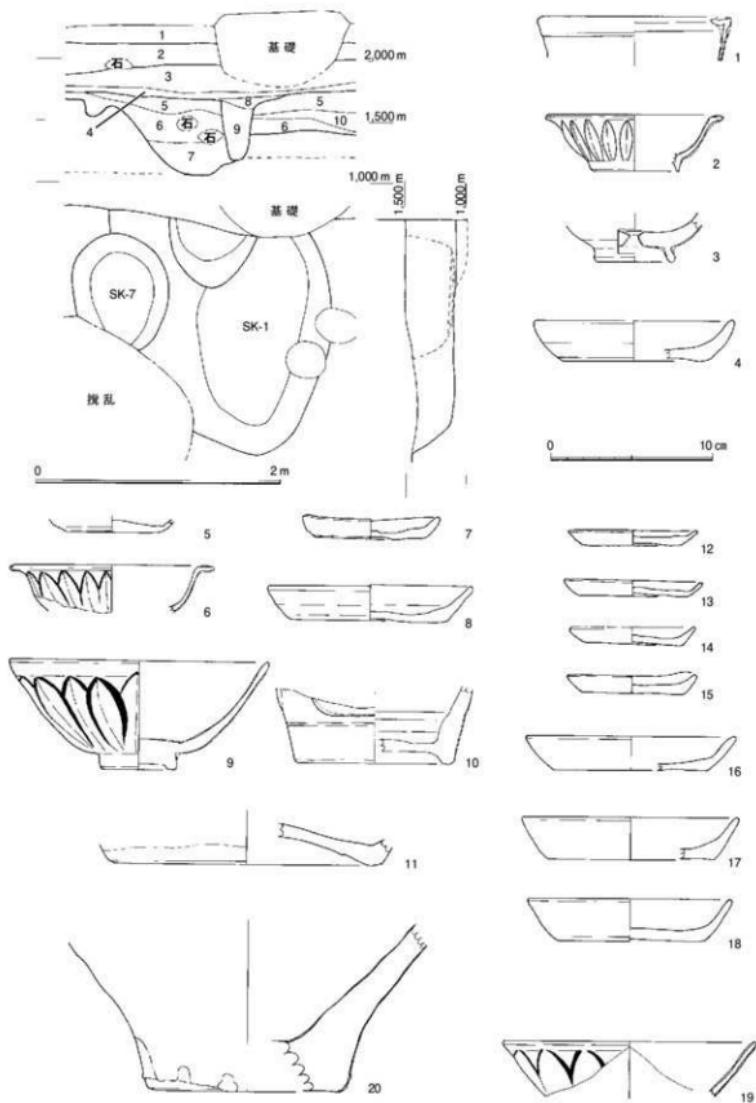
SK-7 (第6図)

トレントI掘削中に検出した。北東側を搅乱に切られている。検出時、上面が焼土で覆われていたため(PL3-1)別の遺構と認定したが、SK-1の埋土の一部である可能性もある。楕円形の土坑で長径100cm短径75cm深さ40cmを測る。土師器・龍泉窯系青磁が出土している。出土遺物が少ないが13世紀代と推定する。

壁面・ピット・遺構外出土遺物 (第8・9図)

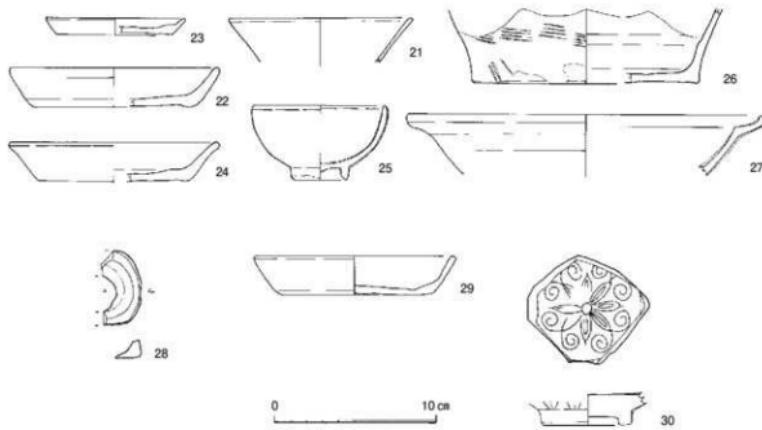
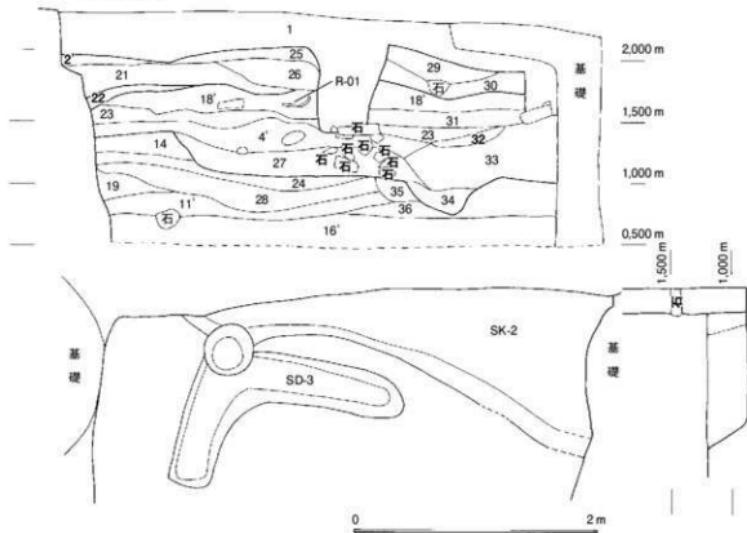
R-01はトレントII北西壁からまとめて出土した。出土層位は18'層である。調査時点では両方ともR-01で取り上げたが、復元後大小2個体の盤であることが判明した(第8図)。31は内面の鉄絵が見えにくいが、一部を除き内底全面に鉄絵草花文が描かれている。内側側面には鉄絵は描かれていない。31の外側底面には墨書が四文字以上書かれていたが、判読不能であったため、観察できた部分のみ示した。32も内底全面に鉄絵草花文が描かれており、31に比べて鉄絵の色彩が残っている。また、32は内側側面にも鉄絵が描かれている。R-01の破片は18'層だけでなく、SK-2下層(礫群下)、グリッドI・II、トレントI黒褐色土層(整地層)一括、トレントII・III追加掘下時からも出土している。R-01の時期は破片の出土したSK-2下層の遺物から判断して13世紀中頃～14世紀前半であろう。

グリッドIから線彫草花文陶器三彩盤が出土している(36)。形態と色彩は京都醍醐寺伝世品三社



第6図 SK-1・7実測図(1/40)およびSK-1出土遺物実測図(1/3)

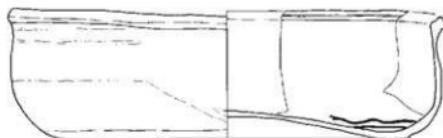
トレンチII 北西壁



第7図 SK-2実測図・トレンチII土層図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

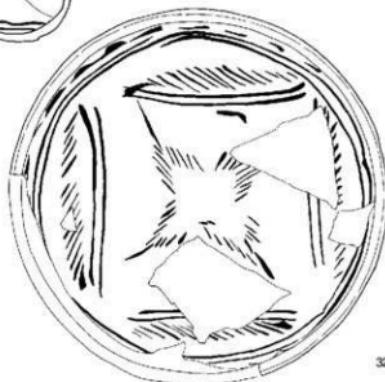


31



一

西

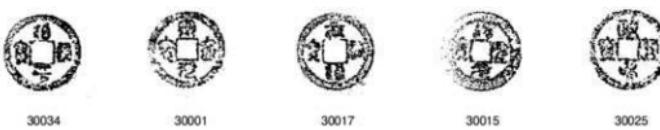
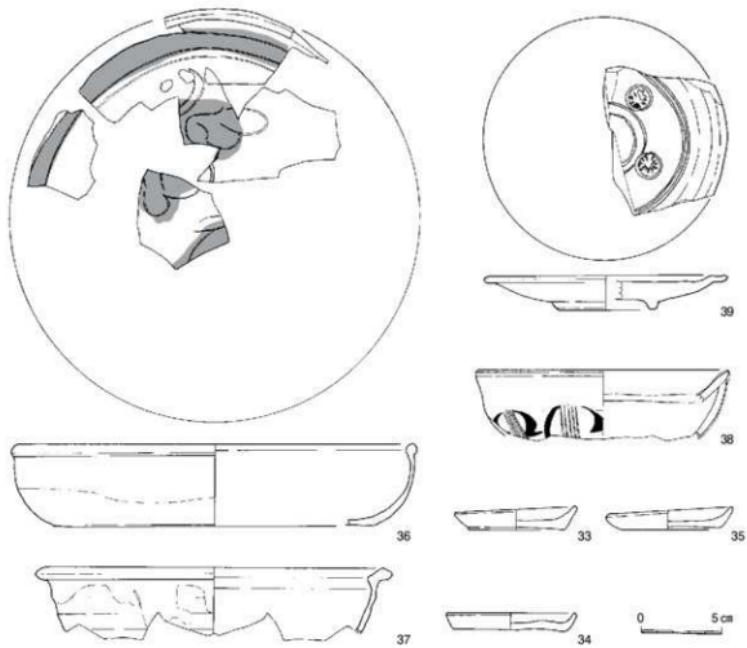
今
立

32

0 20 cm



第8図 トレンチII北西壁出土土器 R-01 実測図 (1/4)



0 5 cm

第9図 ピット・遺構外出土遺物（1/3）および博多遺跡群第155次調査出土銭（2/3）

丹文洗と類似しているⁱ。そのほかピットからは3点の土師器小皿(33・34・35)、グリッドI地山砂層直上から龍泉窯系青磁碗?III類(28)、グリッドIから陶器盤(37)、トレンチIIから高麗青磁皿(39)が出土している。

調査区全体から中国銭が73点出土し、うち34点が判読可能であった(第3表)。このうち残存状況の良好であった10点を図示した。出土傾向は日本全体の出土銭出土率の傾向ⁱⁱとほぼ同一であるが、宋銭の大觀通寶と金錢の正隆元寶が出土例の比較的少ないものであり注目される(第4表)。

IV. 小結

最後に博多遺跡群第155次調査で得られた知見をもとに、本調査地点の土地利用の歴史を考察していきたい。各層の堆積時期を考えるにはR-01破片の出土状況が参考になる。前述したようにR-01の破片は大きな破片が出土した18'層だけでなく、SK-2下層(疊群下=27・33・34層)からも出土している。したがってトレンチIIの層序でのべた3整地層のうち大きく4分したうちの最下層(4'・18'・23'・27'・31'・32'・33'・34層)は一度に堆積したと推定される。このトレンチII3最下層に対応するのは、トレンチIIIでは3・4'・5'・18'・23層、トレンチIでは3・4'・5'・6'・7'・8'・9層である。これらの層が調査区全域に一度期に堆積した可能性がある。また、SK-1からもSK-2と同時期の陶磁器と疊群が堆積しているおり、SK-1・7の覆土の6'・7'・10層もほぼ同時期に堆積したと考えられる。

この推定が正しいとするならば、博多遺跡群第155次調査の土地利用は以下のようない展開を遂げたのであろう。まず、13世紀以前では本調査地点は博多川へ向かって下り始める旧砂丘線の水際傾斜地であった。また遺構も少ないことから、ここは当時の集落の縁辺であり、土地利用そのものが活発になされていなかったようである。しかし13世紀中頃~14世紀前半の間に遺構の埋立と3整地層の下層が一度に堆積し水平に整地がなされ、以後数度にわたる整地が行われるなど、近世の博多町屋として活発に利用されていたようである。

博多遺跡群において最も海寄りの砂州である息浜は12世紀初めごろ博多浜と埋め立てられ陸続きとなり、12世紀後半には前述した古門戸町の第78次調査で、博多浜の墓とは異なる副葬土師器をもつ土坑墓や木棺墓が検出されるなど、平安時代末から博多浜の集落とは一部性格を異にした集落が形成された場所である^v。ただ本調査の成果から考えると息浜西側では平安時代末から利用されていたのは現在の古門戸町辺りまであり、現在の須崎町付近まで集落が拡大するのは13世紀中頃~14世紀前半以降のことである。想像をたくましくすれば息浜の集落の縁辺部であったために第78次の場所に墓地群が形成された可能性があり、さらにその西側である第155次調査地点は12世紀後半の段階では完全に集落の外部であったのであろう。本調査では13世紀代における息浜の砂丘の西南端の状況とその後の息浜の西南方への土地利用の拡大の一様相を捉えることができたといえよう。

i 上角智希 2001『博多 79』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第670集)福岡市教育委員会

ii 大庭康時 1995『博多 44』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第393集)福岡市教育委員会

佐藤一郎 2002『博多 84』(福岡市埋蔵文化財調査報告書710集)福岡市教育委員会

iii 亀井明徳 1977『宋代の輸出陶磁 日本一出土品を中心として』『世界陶磁全集12宋』小学館

iv 国立歴史民俗博物館 2005『企画展図録 東アジア中世海道-海商・港・沈没船-』

v 田上勇一郎 2006『発掘調査から見た中世都市博多』『市史研究 ふくおか』創刊号

第2表 博多遺跡群第155次調査出土遺物観察表

No.	遺物	大分類	小分類	残存率	口径	高さ	底径	焼成	胎土	色調(釉)	色調(胎土)	その他
1	S17層	陶豆皿系青磁	直腹・青少?	<10%	-	12.0	-	良好	褐色	青磁	灰白	
2	S17層	陶豆皿系青磁	折唇・青少?	<10%	(11.0)	3.4	(5.4)	良好	褐色	青磁	灰白	
3	S17層	陶豆皿系青磁	折唇・青少?	<10%	-	-	5.0	良好	褐色	青磁	灰白	見込み中央に複数穿孔
4	S17層	土器	杯	<10%	(12.4)	2.5	(8.6)	やや不良	粗い	褐色	回転赤切面	
5	S17層	土器	盆皿	<10%	-	-	5.8	良好	褐色	灰白	等厚	底面施釉
6	S17層	土器	盆皿・青磁	折唇・4?	<10%	(12.6)	-	良好	褐色	青磁	灰白	
7	S17層	土器	小皿	100%	8.4	1.4	6.9	良好	褐色	青磁	灰白	回転赤切面
8	S17層	土器	杯	100%	12.6	2.2	9.5	良好	褐色	青磁	灰白	回転赤切面
9	S17層	陶豆皿系青磁	碗口 <small>△</small>	25%	(16.0)	6.7	(4.8)	精良	褐色	灰	灰	見込み印押
10	S17層	土器	青磁	20%	-	-	9.8	良好	褐色	青磁	灰白	外縁立体的文様あり
11	S17層	土器	盤	<10%	-	-	(16.6)	良好	褐色	青磁	茶系	
12	S17層	土器	小皿	20%	8	0.9	5.9	良好	褐色	青磁	茶系	回転赤切面
13	S17層	土器	小皿	90%	8.6	1	6.5	良好	褐色	青磁	茶系	回転赤切面
14	S17層	土器	小皿	80%	7.8	1.1	6.3	良好	褐色	青磁	茶系	回転赤切面
15	S17層	土器	小皿	100%	8	1.1	6.1	良好	褐色	青磁	茶系	回転赤切面
16	S17層	土器	杯	<10%	(13.0)	2.1	(9.4)	やや良好	褐色	青磁	灰白	回転赤切面
17	S17層	土器	杯	<10%	(13.4)	2.6	(10.4)	やや不良	褐色	青磁	灰白	回転赤切面
18	S17層	土器	杯	40%	(12.6)	2.6	(10.2)	やや良好	褐色	青磁	灰白	回転赤切面
19	S17層	陶豆皿系青磁	碗口 <small>△</small>	20%	(15.6)	-	-	良好	褐色	青磁	茶系	
20	S17層	陶器	杯	<10%	-	-	(12.6)	良好	褐色	青磁	茶系	第一黑輪
21	S27層	土器	盆皿	<10%	(11.4)	-	-	良好	褐色	灰白	灰白	底面黒青一帯残存 上縁丸打目
22	S27層	土器	小皿	100%	(13.0)	2.4	(9.6)	良好	褐色	青磁	茶系	底面
24	S27層	土器	小皿	50%	(8.6)	1	(7.0)	良好	褐色	青磁	茶系	底面
25	S27層	陶豆皿系青磁	小皿口 <small>△A</small>	50%	8.4	4.6	3.6	良好	褐色	青磁	灰	内凹ハケ調整
26	S27層	陶器	盤	<10%	-	-	(14.0)	良好	褐色	青磁	茶系	内凹ハケ
27	S27層	陶豆皿系青磁	折唇・3a?	<10%	(22.0)	-	-	良好	褐色	青磁	灰白	杯よりは口が大きい
28	S27層	陶器	浅口碗	50%	(44.6)	11	-	-	-	-	-	
30	S27	陶豆皿系青磁	碗口 <small>△b</small>	<10%	-	-	5.7	良好	褐色	青磁	茶系	見込み印押六花文
31	S27	土器	杯	80%	12.4	2.4	9.2	よつう	褐色	青磁	茶系	回転赤切面
31	Gr I-01/ S27層	陶器	盤口 <small>△b</small>	90%	35.9	10.4	29.0	良好	褐色	青磁	茶系	内底熱草花文
31	Gr I-01/ S27層 / Gr II-01層時 / Gr II-02層時 / Tr II	陶器	盤口 <small>△b</small>	80%	30.9	9.4	25.4	良好	褐色	青磁	茶系	内底熱草花文
32	Gr I-01/ S27層 / Gr I-01層時 / Gr II-01層時 / Tr II	陶器	盤口 <small>△b</small>	80%	30.9	9.4	25.4	良好	褐色	青磁	茶系	内底熱草花文
33	Tr I	土器	小皿	100%	7.6	1.4	5.9	やや不良	褐色	青磁	茶系	底面
34	Tr I	土器	小皿	70%	8.0	1.1	6.8	良好	褐色	青磁	茶系	底面
35	Tr I	土器	小皿	100%	7.8	10.14	6.0	よつう	褐色	青磁	茶系	底面
36	Gr I-01層時	陶器	三形腹 (形態は1-2)	20%	(32.5)	9.8	(26.4)	やや軟質	褐色	青磁	茶系	内底熱草花文花 - 三重圓錐
37	Gr I-01層時	陶器	小皿口 <small>△a?</small>	<10%	(22.0)	-	-	良好	褐色	灰白	灰白	
38	Gr I-01層 / 01層時止	陶豆皿系青磁	元口・直腹	10%	-	-	6.2	良好	褐色	青磁	灰白	見込み印押
39	Tr II	陶器	直腹	25%	(15.0)	2.1	(6.4)	良好	褐色	青磁	茶系	見込み印押

残存率の<10%は10%以下、器高の10-14cmは器高の最低値と最高値を、計測値の()は図上復元による推定値であることを示す。

第3表 博多遺跡群第155次調査出土銭一覧

登録番号	遺構・地区	銭貨名	登録番号	遺構・地区	銭貨名	登録番号	遺構・地区	銭貨名	登録番号	遺構・地区	銭貨名
30001	S17層	元承和	30054	トレンチI	折唇・直腹	30029	トレンチII	元承和	30013	グリッドI	折唇・直腹
30006	S17層	元承和	30059	トレンチI	折唇・直腹	30032	トレンチII	元承和	30015	グリッドI	折唇・直腹
30007	S17層	元承和	30060	トレンチI	元承和	30018	グリッドI	折唇・直腹	30006	グリッドI	元承和
30001	S17層	元承和	30047	トレンチI	元承和	30023	トレンチI	元承和	30025	グリッドI	政和
30005	S17層	元承和	30062	トレンチI	元承和	30019	グリッドI	天聖元	30022	グリッドI	正徳五物
30009	S17層	元承和	30057	トレンチI	元承和	30021	グリッドI	天聖元	30067	試掘	元承和
30010	S17層	元承和	30033	トレンチII	元承和	30016	グリッドI	元承和	30005	試掘	元承和
30006	トレンチI	宋承和	30030	トレンチII	元承和	30014	グリッドI	元承和	30030	試掘	元承和
30058	トレンチI	宋承和	30034	トレンチII	折唇・直腹	30017	グリッドI	元承和	30031	判読可能	34点

第4表 博多遺跡群第155次調査出土銭貨名一覧表

銭貨名	銭種	初鋳年	出土順位	出土率	枚数	銭貨名	銭種	初鋳年	出土順位	出土率	枚数
開元通寶	仿銅	621	第5位	7.49%	2	治平通寶	宋銅	1064	第17位	15.0%	1
宋通寶	宋銅	960	-	0.30%	1	熙寧通寶	宋銅	1068	第3位	8.80%	2
元祐通寶	宋銅	996	第19位	1.51%	1	哲宗通寶	宋銅	1078	第2位	11.00%	5
祥符通寶	宋銅	1008	第125位	2.18%	2	元祐通寶	宋銅	1096	第3位	8.02%	5
祥符通寶	宋銅	1009	第180位	1.70%	2	紹聖通寶	宋銅	1094	第8位	3.81%	2
元祐通寶	宋銅	1017	第140位	2.04%	1	大觀通寶	宋銅	1107	第20位	1.05%	1
大观通寶	宋銅	1025	第7位	4.56%	3	政和通寶	宋銅	1111	第9位	3.69%	2
宣和通寶	宋銅	1039	第1位	11.66%	3	正隆通寶	金銅	1158	第38位	0.13%	1

出土順位、出土率については脚注ivの文献を参照した。

図 版



1. 博多遺跡群第 155 次 調査区南東半全景（東から）



2. 盤出土状況（北西から）



1. トレンチ I 南東壁土層 北東側（北西から）



2. トレンチ II 北西壁土層（南東から）



1. SK-1 碑・遺物出土状況（北西から）



2. SK-1・SK-7 完掘状況（北西から）



1. SK-2 碓・遺物出土状況（西から）



2. SK-2 完掘状況（西から）



36



1



39



2



9



10



25



38

1. 博多遺跡群第 155 次調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はかた						
書名	博多 114 - 博多遺跡群第 155 次調査報告 -						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	944						
編著者名	赤坂亨						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号						
発行年月日	2007 年 3 月 30 日						
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
福岡県 福岡市 博多区 須崎町 53番	市町村 道路番号	401300 0121	33° 35' 46"	130° 24' 13"	20051003 ~ 20051026	58.9	共同住宅建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・主な遺物			特記事項	
博多遺跡 第 155 次	集落	中世 ~ 近世	集落 - 中世～近世 - 溝 4 - 土器類 + 須恵器 + 陶器 / 時期不明 - ピット 6				
要約	本調査地点は中世以前において砂丘の縁であまり利用されていなかった土地だったようである。しかし 13 世紀以降になると数回の整地がなされ、この後は継続して土地の利用が行われた。本調査では 13 世紀代における息浜の砂丘の西南端の状況とその後の息浜の西南方への土地利用の拡大の一様相を捉えることができた。						

博多 114

- 博多遺跡第 155 次調査報告 -
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 944 集

2007 年（平成 19 年）3 月 30 日
発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 1-8-1
印刷 川本印刷株式会社
福岡市博多区駅前 5-6-18

